

報告タイトル（＊日本語と英語両方ご記入ください）

GAL-TAN 分析と台湾の文脈
“GAL-TAN Analysis in TAIWAN’ s Contexts”

氏名（所属）

野崎健太(拓殖大学大学院国際協力学研究科安全保障専攻前期課程)

NOZAKI,Kenta (Takushoku Univ. Graduate School for International Cooperation in Security Studies)

要旨（800 字程度）

本稿は、台湾の政党競争を、従来の統一／独立や中国／台湾という単一軸ではなく、主権・統合をめぐる「中国ファクター」と、社会文化的価値をめぐる GAL-TAN 軸が交差する二次元空間として捉え直すことを目的とする。問いは、第一に、主権・統合をめぐる対立と社会文化的価値をめぐる対立がどのように区別され、また結合しているのか、第二に、中国からの外的脅威が国内の自由化と包摂をいかなる政治的機制を通じて促進しうるのか、という二点である。分析対象は DPP、KMT、TPP であり、各党の綱領、法律・司法判断、選挙・国民投票資料および先行研究を用いて質的比較を行う。中心命題は、DPP が台湾の自主性を守る安全保障志向と、人権、法の支配、ジェンダー平等、移行期正義を結びつけ、外部に対しては防衛的、内部に対しては包摂的な「GAL 的ナショナリズム」を形成しているという点にある。これに対し KMT は、中華民国の歴史的・制度的連続性、伝統、秩序、漸進的変化を重視し、相対的に TAN 側に位置する。TPP は、価値対立を専門知、効率、リスク管理へ翻訳する「テクノクラートの TAN」として把握される。実証面では、移行期正義を中心事例とし、同性婚、原宥、死刑を照合する。移行期正義では、人権回復と国家の歴史的起点の再定義が交差し、同性婚では国内の権利改革が台湾の民主主義と人権の対外的正統性へ接続する。他方、原宥と死刑は GAL-TAN による単純な政策分類の限界を示す。理論的には、ナショナリズムを一括して TAN に配置せず、その防衛対象に即して、GAL 的な市民ナショナリズムと TAN 的な文化ナショナリズムを区別する点に意義がある。以上から、本稿は、中国からの外的脅威が社会的自由主義を自動的に生むのではなく、民主化の遺産、市民社会、司法、選挙競争、そして DPP による価値の政治的構築を介して、領域防衛と国内包摂が相互補強的に結びつくと論じる。台湾の政党システムは、統独軸から別の軸へ移行したのではなく、主権と価値の組合せそのものを競う段階に入っている。